

二味の相性



シャクビナスビカ弱い農薬に用いる。根球は、せき、吐き止め漢方薬に処方される。

相乗する絶妙のハーモニー

毒を消し合う良薬に

野生の植物には、スズメノエンドウ、キツネノマゴなど、身近な小動物の名前がつくものがある。里山の農耕文化の名残であろう。

カラスビシャク(サトイモ科)の根球は重要な生薬の一つで、半夏(はんげ)という。この半夏の粉をなめると「えぐ味」を感じる。時々、新入社員に試してみると、「・・・ン」と絶句する。このえぐ味は一生忘れないだろうし、恨みも買う。漢方では鎮吐、鎮嘔(おう)、いわゆる吐き気止め、鎮咳(がい)、去痰(たん)の薬効を期待しているが、絶句するこのえぐ味は台所の生姜(しょうが)をかじるとすーっと消えていく。二味を用いる絶妙のハーモニー

である。漢方は一味で用いることはあまりないと本欄(十月四日付)で述べた。漢方を処方するとき、最も多く用いられる柴胡(さいこ)剤の主薬、柴胡も同様である。

ミシマサイコ(セリ科)の根茎は解熱、消炎、鎮痛などと薬効が書いてあるが、単独で用いるとむしろ毒性がある。そこで、相性のよい黄芩(ごん)Ⅱシソ科コガネバナの根Ⅱと合わせ用いる。

柴胡剤の代表格ともいえる小柴胡湯の薬効をひもとくと、初心者らびつくりする。いわく、神経質で潔癖症や怒りっぽい体質の人が病邪に侵されて四、五日たったところに発症する気管支炎、中耳炎、腎盂(じんう)炎、ろっ間神経痛などの多彩な病気に効くと記されている。漢方古典にある小柴胡湯を用いる「取り決め」にびったりあえば体のゆがみが正され、いろいろなトラブルが解消するわけで、これを「証」といっている。

ある時、「上海ガニ」を食べるに香港行きを誘われた。ピク

トリア湾の夕陽を眺めながらの食事が終わり、最後の飲み物として出されたのが「甘草乾姜湯」。程良い辛味と甘味はのどごしに心地よく、やがて胃袋が温まるのが分かった。乾姜(生姜を乾かしたもの)は熱薬、甘草の成分はステロイド構造を持っていて、急迫を治す。いわゆるシヨックを防ぐもの。未然にカニの中毒を防いでいたのである。

ちなみに、小柴胡湯の構成生薬を記しておこう。柴胡Ⅱ黄芩、半夏Ⅱ生姜Ⅱ甘草、人参(にんじん)、ナツメの七味。人参は胃脾(ひ)を温め悪い所を正常にするもの。ナツメは最も効率のよい栄養剤で、この二味もまた大変相性がよい。